

ヨーロッパの苦い記憶 音楽祭に耽った夏（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2015/9/1 6:30 | 日本経済新聞 電子版

案の定というか、世界的な株価の急落となった。その後、中国政府の追加の金融緩和策などで、落ち着きを取り戻してはいるのだが、疑心暗鬼の状態が続くのだろう。世界の経済成長のエンジンとなってきた中国経済の予想以上の減速が、具体的な指標として明らかになったのがきっかけだ。世界的な株高に対し、不安や危機感のマグマが沸騰点に達して、噴火したようなものでもある。正確な経済指標が公表されていない中国だが、エネルギー消費の減少など、想定以上の減速が明らかになるに従って、「ある日、突然」といったかたちで、金融市場を襲ったのだが、それはいつものように、「ある日、突然」起こった事象ではない。

■バブル崩壊の記憶

金融や経済について門外漢の私ですら、中国のGDP成長率が5%を下回るのではないかと、春の初めにこのコラムで触れていたのだから、専門家にとっては、単に時期の問題だったのだろう。中国政府の思い切った金融緩和措置で、一時的に世界的な株安が収まるのかどうかは、予測が難しいけれど、中国経済を牽（けん）引していた不動産バブルの崩壊をソフトランディングさせることは、いかに計画経済とはいえ、極めて難しいはずだ。問題を先送りしながらバブルの処理をするといった方法は、問題をより大きくしてしまうことにつながりかねないと、危惧してしまう。お金がだぶついて、市場の実態と乖離した価格で取引がなされた日本の不動産バブルの記憶が改めて、鮮明に浮かんでしまう。輸出でため込んだ資金をあれだけ無駄にしたバブル崩壊の記憶が去ることはない。メガバンクの再編、公的資金の投入、もう少し早めに手を打っておけばというのも、後の祭りだった。

忙しさを理由にしているのだが、だれもそんな言い訳を真に受けてくれない。「うわの空の見本のようだ」と、よく言われる。日程の打ち合わせの時などは「うわの空」状態になっていることが多いらしく、後になって、「この約束、誰が入れたのだ」と聞いたりすると、「何月何日何時の打ち合わせの折に、了解をもらっています。今さら変えることはできません」と叱られる。上の空で「いいですよ」を連発するのは、さっさと打ち合わせを終わりたいだけで、真面目にスケジュールを考えていないから、結果的に、ギュウギュウと日程が過密になる。相手もそれを承知で、日程を組むわけで、朝から晩まで時間に追われることになる。それも国内の日程ばかりでなく、海外の日程についても、同じような経緯で進む。

■オペラと人形浄瑠璃

結果的に、今年は半分以上、海外にいるような気がする。今は、ザルツブルクにいる。8月末にベルリンで所用があって、都合がいいからと、パイロイトとザルツブルクに寄って、音楽祭の打ち合わせを済ませてきたらどうかとなり、明確な返事をしないままにアポは重なり、時間が過ぎてしまったのだ。たくさんの演奏会にも行けるわけで、来てみれば、重なる移動の疲れも吹き飛ばすような時間を過ごしている。



高台にあるツヴァイクの旧居から眺めるザルツブルク（筆者撮影）

オペラの筋書きは、荒唐無稽な展開が多い。同列に並べて比較をしては叱られそうだが、オペラを見ていると、江戸時代、大阪の町人がなによりも支援者だった人形浄瑠璃を思い浮かべてしまう。人形浄瑠璃の代表的な演目である「義経千本桜」や「仮名手本忠臣蔵」、「菅原伝授手習鑑」等々、話のすつとび方は半端ではない。少しでも、理に適うのかといったことに神経が行く人なら、これは一体なんなのだと、呆れかえってしまうほどに、好き勝手、自在に展開するのだが、そんなものだと思って眺めると、江戸時代、一方の文化を担った町人の嗜好や価値観が、奔放極まりないドラマから浮かびあがって、面白くなってくる。しかも人形浄瑠璃の主役は、音楽と語り、つまり義太夫である。場面によっては、今で言うラップみたいに、自在なのである。江戸期の言葉がわかり辛いといっ

ても、ワーグナーのオペラのドイツ語を理解するほど困難ではないし、わからないところはすつ飛ばして、太棹（ざお）の三味線と義太夫の、だみ声という形容ができそうな迫力ある語りを耳にして、人形の動きを眺めていると、いつの間にかひき込まれてしまう。なんとも面白い。それが、非論理的なドラマの展開を意に介さない日本人には居心地がいいのである。私たちの



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

世代が、親から伝えられた論理不明ではあるが、「道理にかなう」といった思考のあり方や価値観が支えとなっているのである。

「義経は、武将である。しかも、平家を全滅させてしまった天才的な武将である。しかし、今や彼の周りには『いい人』しかない。となると、『戦って状況を打破する』という選択肢がなくなる。なぜならば、『いい人』を相手にして戦いを始めるのは、『悪い人』のすることだからである。攻められたら戦う、しかし、自分からは戦わない―専守防衛で交戦権を放棄する憲法第9条を持つ日本人のメンタリティは、アメリカに占領される遙か以前の18世紀中頃において、すでに出来上がっているのである」（『浄瑠璃を読もう』橋本治著）

読み込んでいけば、そんな読み方もできる。なにしろ「義経千本桜」では、悪人は藤原朝方しかいなくなって、いい人ばかりになるわけで、「悪」と戦う義経の生きのびる道は無くなってしまうことになる。

ザルツブルクの透明に輝く光を浴びて浄瑠璃のことなど考えたのは、久し振りに訪れたバイロイトで「ジークフリート」の舞台を観たせいだろうか。舞台が見えないほど、深いピットで指揮するのは新しくベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・芸術監督に就任することになったキリル・ペトレンコである。その演奏は、間違いなく素晴らしいのだが、その舞台は何とも形容がし難いもので、私には、まったく理解を超えるものだった。伝説を下敷きに奔放な書き換えを行ったワーグナーのオペラを、現代的な舞台に置き換えることになんら抵抗があるわけでもないのだが、それは才能に恵まれている人間だけに許されるものだ。消化不良のまま散漫としか思えないアイデアを乱暴に撒いただけのような舞台は困るとしか言いようがない。指揮者は舞台が見えなくて羨ましいと思いながら、目を閉じたまま音楽だけを聴こうとしたのだが、何時間も目を閉じ続けているわけにもいかない。



ジークフリートのカーテンコール（バイロイト音楽祭で、筆者撮影）

公演の後、毎年、バイロイトで夏を過ごすという知人たちと食事をしていたら、「去年より、3幕のワニの数が一匹増えていた。来年はもっと増やすのだろうか。なぜ、ワニが出てくるのかはわからないけれど」と、笑い話になった。「最近、舞台演出に東独出身者が使われることが多いのですが、屈折の塊のような気もする」と、バイロイトに住む音楽家の方が呟いていた。「ドイツには、ドイツ人にしかわからない事象がたくさんあります」。

■ 20世紀を理解する鍵

ザルツブルクに来て、まず、リッカルド・ムーティさんが上演するオペラのゲネプロに行く。ぎりぎり間に合ったかと思ったのだが、劇場に駆けつけた時は、すでに、リハーサルが終わったところだった。楽屋で話し込んでいたら、オペラの関係者がムーティさんに丁重な挨拶をするために顔を出す。「いまや、ほとんどの演奏家から、ピアニッシモが消えてしまった。ピアニッシモが消えてしまったということは、音楽が失われることです」。オペラ関係者と話し始めるや、急に大真面目になったムーティさんは、クラシック音楽の危機を、そんな言葉で語り続けていた。

翌日、マティナー（昼興行）で、ムーティさんの指揮による、ユーゴーの原作をもとにした、ヴェルディの初期の作品、「エルナーニ」を、演奏会形式で聴いた。まさに躍動感あふれるヴェルディであり、ひとりの女性をめぐり、山賊の首領と国王と重臣の3人が葛藤をするオペラなのだが、ストーリーの展開はともかく、音楽の力で見事に心を打つものとなっていた。その夜、「ザルツブルクにシェーンベルクを聴きにきたら」と、声を掛けて頂いていたズービン・メータさんとイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団による演奏を聴いた。メータさんは「来てくれたのか」と優しい笑顔で迎えてくれた。

「国家を超えた首都ウィーンに育った。しかもその都がドイツの一地方都市におとしめられる前に、そこをまるで犯罪人のように去らなければならなかった」。こう書いたシュテファン・ツヴァイクのことがふと頭に浮かび、翌朝、ザルツブルク時代に住んでいたという旧居を訪れてみた。第2次世界大戦下の1942年、一冊の著書もメモもなく、「頭脳のうちにだけある回想」を頼りに、リオデジャネイロで「昨日の世界」を書き、夫人とともに自殺した。「すべての友人に挨拶をおくります。私の友人たちが、長い夜ののちに、なお曙光（しょうこう）を見ることが出来ますように！あまりにも性急な私は、今、先立っていきます」。自らの精神の故国であるヨーロッパの自滅を嘆いたツヴァイクの遺書である。20世紀という時代をどのように振り返ったものか、ツヴァイクの旧居のさらに高台にある教会から、ザルツブルクを一望する風景を眺めていた。

喉元まで音楽に浸り続けた1週間だったが、出色だったのはネルソンス・ボストン響によるショスターコヴィッチの交響曲10番。そして、1日だけベルリンを訪れて聴いた、ベルリンフィルの初日に演奏されたラトル・ベルリンフィルによるショスター

コヴィーッチの交響曲4番である。ふたつのショスターコヴィーッチの演奏は、圧倒的な感動を与えるものだった。改めて20世紀という時代を考え込まれたのである。スターリンの専制時代のソ連にあって、作曲を続けたショスターコヴィーッチを理解することが、20世紀という時代を振り返るひとつの鍵となるのではないか。そんな思いをかき立ててくれるほどの演奏だった。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

読者からのコメント

- 小倉摺門さん、60歳代男性**

特に複雑で多様になった現代では、人は道理にかなうことこそ価値をみるべきだと思いますね。時として非論理的であることに道理があり価値がある。歪んだ論理や理屈に惑わされなくて済む。換言すれば、お天道様にみられても恥じないこと。孫子の有名な訓え「不戦而屈人之兵、善之善者也」が真にその高みにある。知識や論理のレベルでは話を意図的に捻じ曲げる人も出てくる。大局を美しい言葉やイメージで飾り立て細部に悪魔を仕込む人も出てくる。食言詭弁強弁を弄してお天道様に口答えするのは恥の上塗りだろう。例えば、積極的平和主義を喧伝する政治権力者が戦争を忌避せず戦争を戦争で抑え込むと構えることは、論理の破綻を超えて言葉遊びでしかないだろう。数千年前の叡智に求めなくても、現代にもソフトとハードを兼ね備えたスマートパワーと云う叡智もある。日本では駄目なら、中国の政治権力者には古今東西の叡智や道理を想起してほしいものです。
- 団塊の凡人さん、60歳代男性**

私も「ある日突然」とか「突然の暴落」とかは、人間社会の流れを正しくとらえていれば本来あり得ない事だと思う。「能力不足の政治家と国民」が多数派だから判断を誤り「突然」という表現になるのです。例を挙げると…1990年以後バブル崩壊が顕在化した際、当時の宮澤首相は、91年時点で邦銀への公的資金投入を考えた。しかし小沢氏、自民党の野田氏ら有力政治家はじめ、国民の圧倒的多数は「銀行救済のため公的資金投入などとんでもない！」の声ばかりでした。あの時点で、もし賢人が多数派であれば、数十兆円のムダ金は不要でした。 安保法制議論でも、米国の退潮、ロシア首相の扨捉訪問、中国の東・南シナ海における強圧行動、IS国の暴虐…等を考慮しながら地に着いた現実的論議をしないと、日本国民に「ある日突然の大悲劇」が生じかねないと考えます。「諸国民の公正と信義を信頼」した結果、膨大な数の国民の命が失われてはなりません。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。